

氏 名	イ 李 イン 仁 ジャ 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 109 号
学位授与の日付	平成 13 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	移住者の「故郷」とアイデンティティ ——在日済州道出身者の移住過程と葬送儀礼からみる「安住」の希求——
論文調査委員	(主 査) 教授 福井勝義 教授 菅原和孝 助教授 田中雅一 教授 嶋 陸奥彦(東北大学) 教授 中牧弘允(国立民族学博物館)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本に定着しつつある在日韓国・朝鮮人（以下、在日と略す）の、とくに一世の墓、葬送儀礼、故郷との関係を記述・分析することによって、移住者たちの「安住」への過程から、彼らのアイデンティティを浮き彫りにした民族誌である。

序章では、在日や移住者に関する先行研究を3つの分野に分けて詳細に検討している。それらは、1) エスニック・マイノリティとしての在日韓国・朝鮮人の研究、2) 在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティに関する研究、3) 出稼ぎを含んだ移住者と母村との関係についての研究である。ついで、国内外で行ったフィールドワークの対象地と、長期間の参与観察と聞き取りに関する方法を明示している。主たる調査地は、在日集住地域として知られる大阪生野区と東京荒川区、および在日人口の中に占める割合の高い済州島出身者たちの故郷である韓国の済州島の村である。

第2章は、墓という具体的な「もの」を題材にした研究である。大阪在住の在日一世たちが日本に建立した墓の墓誌等の実証的な分析と、墓の建立に至るまでの一世とその家族との諸関係をふまえながら、在日社会一般ではなく「個人」あるいは「家族」といった次元で、当事者の立場によって複雑にあらわれるアイデンティティ表現の重層性を浮き彫りにしている。彼らの墓は、韓国と日本、双方の墓制のはざまにあり、どちらか一方に縛られる度合いが小さい。そのため、数少ない自己表現のメディアとして、さまざまなメッセージの込められた個性的な墓が多い。本章で取り上げたのは、在日専用霊園に建てられた人びとの墓であった。それらは、いわゆる「民族的アイデンティティ」をあらわすものでもあるが、同時に個人や一家の自己表現や意思表示を担うメディアでもあることを提示した。本章では、このように238基の墓における記載事例をもとに、従来の在日研究で強調されてきた民族的アイデンティティの表出は、彼らの重層的なアイデンティティ表現の一部分であったことを裏づけている。

つづく第3章および第4章は、移住先と母村という「二つのムラ」に生きる在日済州島コネリ出身者に関する分析である。済州島出身の在日は、とくに集住する傾向が強く、移住先においてムラ的なコミュニティを形成することが少なくない。また移住開始後90年が経った今日でも故郷との交流を続けている。

第3章の葬送儀礼の研究は、日本で亡くなった人の遺体を火葬せず韓国の母村に運んで埋葬する、センジャン（生葬）という特異な葬送を行った一家の調査から、移住者にとって「生」と「死」がどのような意味をもつかを探った民族誌である。済州島のコネリから荒川への移住は1910年代の出稼ぎに始まり、荒川在住の在日世帯数は現在では母村をしのぐものとなっている。彼らは、親睦会をはじめとするさまざまな組織や、婚姻による親戚関係、仕事の取引関係などによる多層的で密接な関係を保ち、荒川に「第二のコネリ」ともいうべきコミュニティを形成している。本章では、自らすすんで日本に移住した一世がどうして故郷に埋葬されることに強くこだわるのかという問いかけに対し、移住先の日本は生きていく場として満喫できるところであるが、「死」を意識した一世が求めるのは、親しい先祖が眠り、韓国の祭祀によって安らげる故郷の墓

地である、ということを具体的な事例をもとに明らかにした。

第4章の故郷との交流に関する研究は、移住の歴史とともに母村との関係の変遷をたどったものである。本章では、移住者と母村の人たちが互いに同一の共同体として意識していた初期から、歴史のうねりに翻弄されて疎遠になっていく過程を丹念にあとづけつつ、そうなりながらも理想の「観念的な故郷」を渴望する移住者のアンビバレンスを描こうとした。移住先での母村との交流の経過を、在日から故郷のコネリへの寄付、郷里での敬老会、コネリの村人の日本への出稼ぎ、一世の帰郷、二世・三世の故郷訪問といった出来事から追った。国交がない1950年代から始まったコネリへの寄付は、1960年代から本格化する。しかし、ひんぱんな交流は、お互いの現実を見せることにもつながり、さまざまな不調和を生み出す。そこで、「故郷」に対してあえて距離を置くことによって理想的な「故郷」を守ろうとする一方、認めがたい「故郷」の変容を目の当たりにして憤慨したりする言動がみられる。第4章では、こうした「故郷」との往復過程で、移住者たちが移住先で「安住」のあり方を模索し続けている姿を如実に描いている。

終章では、先行研究をふまえながら、全体をまとめつつ、本論文の特徴を論じている。従来の在日韓国・朝鮮人研究では、在日＝エスニック・マイノリティという定式を強調しがちで、在日社会はつねにマジョリティを意識した一枚岩のように描かれてきた。それに対して本論文では、豊富な具体的資料をもとに、マイノリティとマジョリティという対立の枠組みを超えて、移住者たちのもつ普遍的な生の戦略を、アイデンティティ表現の重層性という視点から分析しているところに特徴が見いだされる。

論文審査の結果の要旨

本論文の学術上の貢献として第一に指摘できることは、在日韓国・朝鮮人（以下、在日と略す）の移住にともなうアイデンティティ表現の重層性を、とくに在日一世の墓や葬送儀礼、さらには彼らの故郷との関係を具体的に記述していくことによって浮き彫りにしたことである。

在日をエスニック・マイノリティとして研究したものは、本論文の先行研究でふれられているように、これまでも数多くなされてきた。しかし、本研究のように、彼らを移住者としてみなし、彼らのアイデンティティや故郷との関係を、東京の荒川区における1年8ヶ月の住み込み調査をはじめ、彼らの故郷である済州島における7ヶ月にわたる住み込み調査などをもとに実証的に探ろうとした研究は、国の内外を問わず皆無である。そうして得られた本研究の成果は、これからの在日研究のみならず、広く移民研究やエスニシティ研究の分野にとっても、高い学術的意義をもつものと評価できる。また、本論文では、従来の調査研究の主流が在日の一つのエスニック集団として扱うものであったのに対し、このような集団単位で語られるエスニック論が在日の場合には当てはまらないことを明らかにし、具体的な資料をもとに家族や個人といった次元を組み入れながら分析を行っており、エスニシティ研究の領域においても大きな貢献を果たすものとなっている。

本研究におけるもうひとつの斬新さを示すものとして、移住者としての在日一世たちの「なま」の人生を、墓という「動かない物体」を調査対象に選んで実証的に分析していった点があげられる。申請者は、関西のみならず、済州島において在日が建てた数多くの墓を対象にして、ひとつひとつに刻まれた墓誌を丹念に記録し、データベースを作成すると同時に、葬送儀礼に参加し、綿密な調査を行った。具体的な「もの」を介した実証的な本研究は、ややもすると抽象的になりがちなアイデンティティやエスニシティを対象とした研究において、歴史的にみてゆるぎない一里塚を構築したものとして高く評価される。

さらに、従来のマイノリティ研究に一石を投じている点も見逃すことができない。これまでのマイノリティ研究の多くは、マイノリティがおかれている差別的な状況を記述することによって、かえってマイノリティとマジョリティの境界を明確にさせてしまう結果にもなっていた。しかし、本論文は、差別をかきたてるような解釈姿勢をとることなく、できるだけ客観的に移住者の生のあり方を見つめていく視点にたつて、一人の人間として「安住」への模索を続ける移住者の生のあり方を見つめていく視点にたつて、一人の人間として「安住」への模索を続ける移住者の姿を如実に描き出そうとしている。このように、移住者の多様性やアイデンティティの重層性を捨象しないで、等身大の彼らの姿を描き出そうとした申請者の調査者としての姿勢は、注目に値するものである。

このことと関連して、本論文は、高い学術的意義をもちながらも、平易な文章で描かれている。それは、調査の対象者で

ある当事者自身の目にふれることを念頭においているかのような印象を与える。実際に、本論文の前提となった諸論文は、当事者自身の目にもふれ、そのことが彼らの本研究に対するよりよい理解につながっている。そのことは、また本論文の内容の深みをましている、といえよう。

一方、本論文は、これまでふれてきたように、特定の価値観にとらわれることなく、事実をふまえて、誰が読んでも自分の問題に引き寄せて読むことのできる民族誌、すなわち多面的な読み方を許容する民族誌に仕上がっている。とりわけ、センジャン（生葬）を扱った第3章と、故郷とのつきあいを描いた第4章は、いきいきとした情景が伝わってくる。

本論文が新鮮な印象を与えるのは、なによりも申請者の研究・調査における方法上の特質によるところが大きいと考えられる。当事者の隣に寄りそって、当事者と同じ目線にたって、彼らの背負ってきた歴史を見通していこうとする申請者の調査スタイルは、日韓両国語に通曉した言語運用能力と、長年の日本滞在を経て獲得した日韓両国の文化・社会状況の深い理解によって支えられている、といってもよい。

このように、マイノリティとマジョリティという対立の枠組みを超えて、在日の移住過程や葬送儀礼、さらには故郷との関係を丹念に記述・分析していくことによって、彼らのアイデンティティ表現の重層性を実証的に浮き彫りにした点において、申請者の本論文は、本研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果として判断される。また、本論文の前提となった諸論文は、すでに著書（共著）や学会誌に公表され、高い評価を受けている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成12年6月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。